

書物の美しさについて

法政大学法科大学院教授 交告 尚史

書物の本来的な機能は情報や思想の伝達にあると考えられる。ゆえに、書物を求める人にとって、その価値が内容にあることは当然であろう。内容といえば、情報の正確性、思索の深さ、的確な構成など幾つかの要素が浮かぶが、ここではその種の分析は行わない。というのも、書物の美しさという外見が論題であるから。ここでいう書物の美しさとは、造型、装丁、活字及び行間並びにそれらの関係性から感じ取ることのできる美である。それは、情報や思想の伝達にとって必須ではない。では、一切無用と切り捨ててよいか。その点を少しばかり考察してみたい。手始めに、昨夏に読んだ2冊の本を紹介しよう。

まずは、ヘレーン・ハンフ編著／江藤淳訳『チャリング・クロス街84番地—増補版』(中公文庫、2021年4月)である。原著は1970年刊行。チャリング・クロス街84番地は、ロンドンのマークス社という古書店の所在地。著者のハンフはニューヨークに住む女性脚本家。1949年10月5日、購入希望古書のリストをマークス社宛てに送った。それから30年に亘り同社の人々とくに社主のフランク・ドエルとの間に交わされた手紙を編集したのが本書である。手紙といっても、注文書や送り状に添えられた短いものである。例を一つ挙げる。「ニューマンの著作はほぼ一週間前に到着、興奮状態からやっと落ち着きを取りもどしはじめたところです。ニューマンの本を一日中机の上において、ときどきタイプライターを打つのを止めては手を伸ばし、さわってみたりしています。初版本だからというのではなく、こんなに美しい本はいまだかつて見たことがないからです」(45頁)。

次は、M.D.ハウ編／鶴飼信成訳『ホームズ—ラスキ往復書簡集』(岩波現代選書、1981年)である。これは、アメリカの裁判官O.W.ホームズとイギリスの政治学者H.J.ラスキの往復書簡のうち、1930年から1935年の間に交わされたものの集成である。二人の文通が始まったとき、ホームズは75歳、ラスキは23歳。若いラスキが次から次へと書物を薦めるのであるが、ホームズの方は秘書に読んでもらうことが次第に多くなっていった。ラスキという人は、人物でも書物でも好悪がはっきりしている。メイトランド、ポロックそしてケルゼンを称揚する一方で、パウンドに対する評価は手厳しい。そういうところはたしかに面白いが、これ以上は触れない。読者にお伝えしたいのは、たとえば次のような文章である。「それからハリントンの『オセアーナ』のきれいな初版本があります。これは私の教え子がくれたものですが、私は自分の持っていた方は売ってしまい、それで素晴らしいサヴィニーを買いました。見るだけでうらやましくなってしまいますよ。妻のいうところによると、この七巻本みたいに美しい着物で着かざっている人は品性が疑わしいというのですが、しかしとにかく素晴らしいものです」(23頁)。

私は、上に引用したような文章を読んで痺れるタイプの人間である。日本の書物はカバーがかけてあることが多いので、それも観賞の対象となる。最近の法学分野の本では、齊藤芳浩『統治行為の法理』(法律文化社、2021年)と小谷利恵『行政刑法—罰則と処分法則』(成文堂、2021年)が気に入った(自著は選考対象外)。前者のカバーは、黄ばんだ白地の紙に書名が記されているだけで愛想がないが、それを外すと落ち着いた赤色の表紙が現われる。その一瞬の変化に妙味がある。後者は、カバーに記された書名の色彩(本題は黒、副題は私好み)の青)が素晴らしい。

こうした美しさは、それを目にした人に快感を与えるという意味で、それ自体が多くの人にとって価値である。他方、美しい書物はその内容を理解できる人の傍に置かれている状況を想像すると、その人たちがそれを日常的に利用する場合と、所蔵して時々眺めるだけの場合を区別する必要があるように思えてくる。前者では、並の本よりも心地よく読み進められるという点に上乗せ的な価値が認められる。それに対して後者の場合、一見したところでは、普通人におけると同様の美的価値しか存しないように見える。しかし、美しい書物を身近に取り揃えて日々を過ごすことの喜びは、それを喜びと感じる人々にとっては、一時美しいものを見せられた場合の心地よさよりも格段に優るのではないか。そのことを思えば、われわれはやはり美しい本造りを心がけるべきであろう。